

全国 保健所長会 だより

はじめに

「公衆衛生若手医師・医学生サマーセミナー(PHSS)2022」は、令和4年8月20日(土)、21日(日)の2日間、都市センターホテルで3年ぶりに集合形式で開催されました。地域保健総合推進事業(全国保健所長会協力事業)「公衆衛生医師の確保と育成に関する調査および実践事業」事業班において、公衆衛生分野に関心がある医師、医学生のほか、公衆衛生分野に入職後5年以内の医師を対象として、例年30〜40名の参加があります。

今年度は感染症対策のため定員30名としましたが、定員以上の申し込みがありました。参加動機と熱量により選考された34名の参加者と全国から参集した25名の公衆衛生医師が熱い討論を繰り広げる2日

2日目のプログラム

前日には21時近くまで討論が続いたにもかかわらず、朝8時開始のパワーモーニングにも約半数の参加者が来場されました。ここでは植田英也氏(大阪市健康局健康推進部健康施策課医長)により、第7波のピーク時における保健所での新型コロナウイルス対応について解説がありました。

引き続き、堀切将氏(福島県相双保健所所長)の「被災地、福島の復興再生に向けて」では、東日本大震災の発災時における保健所対応を当時の貴重な写真を交えて臨場感のある説明がなされました。また時間とともに変化する被災者支援では、被災者に対する健康支援、心のケア事業そして母子保健対策について解説され、「令和になってもまだこれらの事業を行っていることは、まだ避難生活が終わっていない」と述べられ



サマーセミナー 2022の様子

公衆衛生若手医師・医学生 サマーセミナー(PHSS) 2022 報告

PHSS2022運営委員長/福岡市南保健所健康課長

山本 信太郎

間となりました。プログラムは従来の講演、グループトークおよび全体討論に加え、初日プログラム終了後のナイトトークと2日目プログラム前にはパワーモーニングを加えるなど、参加者と公衆衛生医師との交流を増やす工夫をした結果、参加者に対する事後アンケートでの「イベントにはどのくらい満足されましたか」の設問では平均9.7点(0〜10点の11段階評価)と、参加者の満足度の高いセミナーとなりました。

初日のプログラム

宮園将哉氏(大阪府健康医療部保健医療室副理事)による「公衆衛生医師が身につけるべき専門能力・コンピテンシーとは」では、社会科学系の専門医に求める能力やキャリアパスについての具体的な説明がなされた後に「コンピテンシーは、社会が人に対し

ました。

久保達彦氏(広島大学大学院医系科学研究科公衆衛生学教授)による「ウクライナ避難民支援における公衆衛生の役割」は、東日本大震災で原発の労働者への熱中症対策と環境整備に取り組みされた経験談から始まり「非常にうまくいくと改めて感謝されないのが公衆衛生の真髄」と説明されるとともに、「公衆衛生は共同社会の組織的な努力を通じた健康社会の実現」というウィンスローの定義をご紹介されました。引き続き、災害は地元の対応能力を超えて外部の支援を要する状況で、受援者と支援者との調整を担うのが公衆衛生と述べられました。さらに、調整の仕掛けの一つとして紙様式の標準化(J-SPEED)をご紹介され、J-SPEED方式が海外で使用された事例を紹介されました。「みんなでこれを使おうと決める・決めた・使うということが、共同社会としての組織的な努力であり、そここそが公衆衛生の一つ」と述べられました。

全体討論はモデレーターを尾島俊之氏(浜松医科大学健康社会学医学講座教授)にお願いしました。宇田英典氏(地域医療振興協会シニアアドバイザー)は、公衆衛生医師として活

て何を求めるのか、社会が行政に対して何を求めているかによって規定されていく。一方で、公衆衛生医師が所属する行政機関の中でも求められる役割、能力そして専門性が大きく変わる」と述べられました。

吉田穂波氏(神奈川県立保健福祉大学教授)は「頼るスキル(受援力)と組織づくり」において、「受援とは、他人からの支援を受け入れること、そして力はそれを発揮できる能力。これは個人の持つべきスキル」と説明された後に、さまざまな受援力が必要になった「自身の経験を」紹介されました。次に心理的安全性や頼り上手な人の特徴を示され、最後は「相手に敬意と感謝を込めて頼ることで頼りやすくなり、相手も頼りやすくなります」と説明されました。

全体討論はモデレーターを武智浩之氏(群馬県利根沼田保健所(兼)吾妻保健所所長)にお願いしました。

躍されてきた経験や魅力、そして今後求められる役割や社会学系専門医制度の概要について述べられました。また社会学系専門医試験を受験された鈴木恵美子氏(山形県最上保健所所長)には具体的な受験体験談を、藤田利枝氏(全国保健所長会副会長)や向山晴子氏(東京都世田谷保健所所長)には「自身のキャリアのご紹介やこれまでの公衆衛生生活の経験談を、そしてそれぞれ現役保健所所長として公衆衛生への思いを語られました。

おわりに

事後アンケートは参加者全員から回答がありました。その感想には「公衆衛生医師の働き方の多様性と魅力を感じた」「全国には公衆衛生マインドを持った方がたくさんいることが分かった。公衆衛生医師としてのどのように仕事と向き合うかの道標となった」「公衆衛生は国民全員を救うことのできる魅力的な学問」など、キャリア・働き方、仲間・マインド、仕事内容などについての意見が寄せられました。「知り合い・友人に、公衆衛生医師の仕事を強くお勧めしますか?」の設問では、0〜10点の11段階評価で8点以上である、いわゆる仕

事内容を

曾根智史氏(国立保健医療科学院院長)は「臨床と公衆衛生は、はつきり二分されるものではなく、公衆衛生の中に臨床があり、臨床の中に公衆衛生がある。どこにいても公衆衛生マインドが必要」と述べられ、また高橋宗康氏(厚生労働省健康局健康課課長補佐)は臨床から行政に入る経緯を紹介された後に、厚生労働省で仕事をする思いを語られました。そして内田勝彦氏(全国保健所長会会長)は臨床経験と公衆衛生医師について、白井千香氏(全国保健所長会副会長)は「自身のキャリアについて、時にはユーモアを交えて語られました。

通常のプログラムとは別に19時30分から開始したナイトトークでは、自由参加にもかかわらず、約半数の参加者が来場されました。ここでは、早川貴裕氏(栃木県保健福祉部医療政策課課長補佐)と高橋千香氏(東京都世田谷保健所感染症対策課長)により、県庁および保健所における具体的な対応事例のご紹介をしていただきました。参加者にとって、若手公衆衛生医師の携わる具体的な業務の理解が深まる内容となりました。

事を推奨する者が30名(88%)、「公衆衛生医師の仕事をどのように感じていますか?」の設問では「わたしは公衆衛生医師という仕事にすっかりハマっている(夢中だ)」が11名(32%)でした。これらのことからPHSSは参加者に公衆衛生の魅力伝える機会になったと考えられ、改めて開催する意義を実感しました。公衆衛生医師のさらなる確保に向けてPHSSの特徴の一つに、普段接することの少ない公衆衛生医師と交流ができる機会であることが挙げられますが、公衆衛生への興味・関心を持つ者同士が自由に意見交換し、関係づくりができるファンミーティング的な側面もPHSSの魅力と感じています。今後、より多くの医学生、臨床医等に公衆衛生への興味、関心を持ってもらい、公衆衛生医師の確保・育成に確実につながるよう取り組みたいと思います。最後に、運営にご協力いただいた事業班メンバーおよび日本公衆衛生協会の松谷有希雄理事長ほか事務局の皆さまに深くお礼申し上げます。

※講義の資料を公開していますので、興味のある方はぜひご覧ください。
http://www.phcd.jp/02/j_seminar/html/JN_PHSS_2022.html